



THE JAPANESE SCHOOL in LONDON

ロンドン日本人学校だより 5

学校教育目標

自ら学び、心豊かにたくましく国際

社会を生きぬく児童生徒の育成

合い言葉：自立・貢献・気品

2022(令和4)年

月3日発行 ロンドン日本人学校

令和4年度 第2号

合言葉「自立・貢献・気品」をめざして

校長 佐藤 雅彦

英国の首都ロンドンは長い歴史を持つ伝統的な都市ですが、日本人学校の校舎はもちろんのこと、学校周辺の建造物からもその重厚な歴史を実感することができます。

朝、8:00には第1ゲートが開き、グリーンゲート前にたくさんのお子さんが集まります。8:05ちょうどに「おはようございます！」の元気なあいさつで一斉に教室へ向かいます。「自立・貢献」の合言葉に、今年度から加わった「気品」の実現を目指し、まずは爽やかに元気なあいさつを呼びかけています。ロン日の子どもたちは本当に素直で優しく、あたたかな雰囲気をもっています。その子たちと毎朝、毎夕のあいさつを交わせる幸せを感じます。

合言葉の3つ目【気品】(エンパシーを高める)

読書は私の趣味のひとつですが、この3年ほどの間に読んだ本の中で心に残っているものとして、イギリス・ブライトン在住ライターのブレイディみかこさんが著した『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』があります。おそらくお読みになった方も多くいらっしゃるのではないのでしょうか。地元ブライトンの公立中学校へ通う息子をめぐる出来事を綴ったエッセイです。エッセイですから、実話なのですが、そこにはイギリス社会の様々な側面が凝縮されています。貧困や移民、差別、そういった問題に子どもたちは直面していくのですが、それを少し離れたところから見る親の思いも読み取ることができます。子どもは純粋であるがゆえに、様々なことを考えます。しかし、子どもの言葉の裏側に隠されている思慮深さも感じるのです。イギリスに移り住んだ子と貧困な家庭に生まれた子とが互いに差別し合い、その間に主人公の少年が挟まれる構図の中で、その子はどのようにふるまえばよいのだろうかと思ひ、考えます。しなやかに乗り越えたり、挫折してしまったりします。ボランティア活動での古着販売で友人にその一着を無償で渡す際には、「彼はそのことを恥じるかもしれないし、僕のことを警戒するかもしれない。」「もしも、彼から、『なぜぼくにしてくれるの?』と問われたとしたら、ぼくはな

んと答えればよいのだろう。」と熟考します。

そして、実際にその場面はおとずれるのです。主人公であるブレイディさんの息子はこう答えます。「だって、君はぼくのとみだちだから。」と。読み進めながら、「私だったら何と言うかな。」と考えていましたが、その答えは、私の思いもよらないものでした。

相手の状況やその心情など、いろいろなことを考えて到達する自分の考えには、共感や同情とは異なる「凜とした力」が加わります。それこそがエンパシーだと私は理解しています。

また、この本の中には PSHE 教育や Ofsted(学校監査システム)など、英国の教育事情にもふれられている点にも興味を抱きました。

ウクライナとロシアに関する問題など、世界中のそれぞれの国が孤立しつつある中で、その問題を根本からとらえるきっかけともなる本のようにも思えたのです。もちろん、そこまで深く考えなくとも、自分自身の子どもの頃の心情を思い出したり、目の前の我が子の悩みや辛さ、その思いを感じてあげたりすることにつながるように感じます。(本校の学校図書館にもこの本はおいてあります！)



Ofsted 進捗モニタリング監査結果について

4月26日の午後、英国の公的機関である Ofsted(英国教育水準局)による進捗モニタリング監査が実施されました。正式の通知は後日ということですが、監査官から口頭で、「Independent school standard(英国私立学校基準)に達している。」との総合評価を受けました。さらに、次回のフル監査は、2年以内に実施予定とのこと。

[ロンドン日本人学校公式 Blog](#)

ロンドン日本人学校の“今”を伝える
公式 blog を御覧ください。

